相州自由民權烈士伝
今福元穎・胎中楠右衛門・大島正義

胎動

TAIDO

長田進治

Seito 文庫

胎 動

～ 相州自由民権烈士伝 ～

今福元顕（もとひで）　胎中楠右衛門（たいなかくすうえもん）　大島正義

長 田 進 治

海 援 書 林 版

見上げる丹沢の峰々は雲足も速く、季節はずれの雷鳴に振り向けば、立ち枯れの杉にトンビが一羽、向かい風に身を任せている。

愛甲郡荻野村の旅館、辰巳屋（たつみや）の階段はどれほどの歴史を刻んできたものか、使い込まれた踏板は、身体の重みを受けてミリミリと音をたてた。

わしの名は今福元頴（いまふくもとひで）、神奈川県高座郡中新田村の人間だ。今日は自由党の集会に招かれてやって来たが、会場となった旅館は一階から三階まで、広間といい客間といい、あるいは中庭まで、酒に酔った男たちの騒ぎで満ちている。

「この馬鹿どもが……」

わしは、白足袋（たび）のつま先を見つめ、ため息が出た。

「こいつら自由民権を、お祭り騒ぎにしちまいやがった」

それがわしの思いだ。

㈠　明治維新

自由民権運動。それは、明治維新という革命に湧き上がった若者の息吹を糧とし、西洋からやって来た自由という思想を座標として、この国が新たな時代に向けて彗星（すいせい）のごとき輝きを放った、そんな出来事であったとわしは思う。

革命とはいつの世も血を欲するものだが、維新を実現した志士も幕府の側も全面衝突を避けたのは、まことにもって賢明であったと言うほかない。仮に薩長と幕府が江戸を舞台に交戦するような事態となっていれば、内乱に乗じて国を奪おうとする欧米列強によって、我が国は四分五列の様相を呈していたことだろう。

しかしその一方で、江戸城の無血開城に象徴される穏健な結末は、この国の巷（ちまた）にあふれた革命の血と、熱の行き場を失わせた。やがてそのごく一部は西郷隆盛のもとへ結集し、西南戦争を引き起こした。しかし、そればかりでは時代の転換

期が生み出す力を発散させるには足りず、若者の胸に沸々と湧き上がる期待や失望や怒りといった思いが、自由民権運動という政治運動へと向かったと言っても良いのではないだろうか。

徳川幕府二百六十五年の体制が瓦解したのだから、当然のことながら御一新からしばらくこの国は乱れた。いや、実際には幕府の力が衰えを見せた幕末の頃から世情は安定を欠き、幕府直轄領の広がるここ相模の国でも、辰巳屋のある荻野村では倒幕をもくろむ薩摩藩の連中によって、山中藩という小藩の陣屋が焼き討ちされ、多くの人が死ぬような血なまぐさい事件が起き、草莽に眠っていた人々の心を揺さぶったものだ。

維新によって身分を失った下級武士は食い扶持を失い、中には徒党を組んで金のありそうな民家に押し込みをかけ、金品を奪うだけでなく女に手をかける。そんなことが国中で続いたようだ。

しかし、三百諸侯と称される多くの藩と藩主は維新後もしばらくは存続し、

これらの藩や旗本によって、表向きの治世はなんとか維持された。

やがて、天皇を中心とした新たなご政体、つまり維新政府の統治が始まり、大きな変革が次々と行われた。例えば、三百を超える諸藩の藩主が天皇に身分を返上する版籍奉還（はんせきほうかん）がある。これに続いて行われたのは廃藩置県（はいはんちけん）だ。諸藩に代わって全国に三つの府と三百二もの県が置かれ、それまでの藩主（殿様）を全て東京に住まわせることとし、府、県にはそれぞれ薩摩や長州の人間が県令として赴任し、政府の方針に基づいた統治を行うと共にその数は統合されていった。

続いて行われた突然の新暦の導入では、正月がひと月以上も早くやって来ることになったのだから、巷（ちまた）で混乱が生ずるのは当然であった。そして何よりも人々にとって影響の大きかった改革と言えば、地租の制定であろう。政府はそれまでの年貢に代わり、国じゅうの土地に六段階の値を付け、毎年その地価の三分（%）を銭で払わせることとしたのだ。

そのほか、居住地編成・戸長制・地券発行・徴兵・警察制度・教育令・伝染病対策、はたまた裸の禁止、チョンマゲ廃止に至るまで、様々な改革が毎月のよう

に政府から言い渡されるが、そのための予算が充分に付いてくるわけでなく、その労力も金銭の負担も、多くは在地の地主層などが賄(まかな)ったのだ。

一方政府の側は地租によって人々から重税を巻き上げ、軍備を整え、港を作り、鉄道を敷き、道路を作る。欧米列強によって蚕食される亜細亜の中で、我が国が独立を守るために、急ごしらえの近代化に必死だったのだ。しかしこうして重い地租を課せられたのでは人々は疲弊(ひへい)してしまう。結果としてあちこちで生活に窮した困民による暴動が起きたのも無理のないことだった。

わしは思う。政府は軍備だ鉄道だと近代国家の体裁ばかりを整え、人々は散切り頭だ洋服だと、見てくればかりを西洋に真似ているが、それが真の文明開化なのか？　と。そんなことでは、本当の意味でわしらの国は欧米列強に倣(なら)ってはいない。

欧米列強の姿を見、これに負けない国を創るとするならば、我らもこれら進んだ欧米の自由と民権の思想、そしてそれに基づく制度をこそ倣って国を立ち上げ

なければならんのだ。

「考えてみてもらいたい。国力とはすなわち国民力の集合体だ。その国民個々はムチに打たれて力を発揮するものではない。自由があり、自発的な発想と努力、健全な欲望があってこそ、国民は最大の力を発揮するのだ！」

かつて私の呼びかけに応じ、国会開設の建白書に名を連ねてくれた人々は相州一帯で二万三千にのぼった。